『 tempo 』

作者　淺羽 一

南イタリアの冬は灰色だった。だけど私の心には、その静けさこそが何よりもありがたかった。ひどく冷たい海風は、私の体を引き込もうとしているのか、それとも追い払おうとしているのか。田舎町の海岸線の片隅で、私は行くことも戻ることも出来ずに、気付けばずいぶんと長い間、ずっとくすんだ海を眺めていた。

「やぁ、こんにちは。観光客かい」

と、不意に声を掛けられて振り返ると、そこにはいつからいたのか、コーデュロイのジャケットを着た小柄な老人が立っていた。癖の強い髪の毛と同様に色落ちしたジャケットは、しかし不思議とみすぼらしさを感じさせるよりも、まるで人生の深さを代弁している風合いだった。或いは、それは妙に愛嬌のある笑顔のせいだったのかも知れないけれど。

「…はい」

私は僅かに間を置いた後で、小さく頷いた。せっかく話し掛けてくれたのに無視するのは失礼に当たるから、なんて理由は、後付けの言い訳に過ぎなかった。実際は、ただ単に自分を知らない相手と話をしてみたくなっただけだった。もしかしたら、私はこれを待っていたのだろうか。

「中国人？それとも、日本人？」

こちらを気遣ってくれているのだろう、多少の訛りはあるもののゆっくりと丁寧に紡がれる言葉は、大して現地語の上手くない私にとってありがたかった。

「日本人です」

拙いながらも答えると、途端に老人は嬉しそうな顔になって「それは良かった」と言った。「日本は、俺の好きな国なんだよ」。

「そうなんですか」

「どうだい、お嬢さん。もうじき日も暮れるし、もしも良ければ夕飯までの時間つぶしに、その先の店で軽く飲みながら日本の話を聞かせてくれよ。そこのリモンチェッロは、この町で一番なんだ」

正直、驚くと同時に、かすかに可笑しくなった。イタリア男は女好きと聞くけれど、まさか自分がこんな誘いを受けるだなんて考えていなかったからだ。

でも、私は結局、動かなかった。代わりに、「そこで、パネトーネは食べられますか」と聞いた。

「パネットーネ？」

案の定、老人は僅かに戸惑った風だった。「いやぁ…。もう、クリスマスはとっくに過ぎちまったからなぁ」。

「…そうですか」

パネトーネは、砂糖漬けのフルーツなどの入ったドーム型のスポンジケーキだ。そして、一般的には販売時期が決まっている。かつて、彼がそう教えてくれた。いつか二人で一緒に行って食べようと。だから私は、それが無いだろうことも知っていた。

だけど老人は、私の反応をどう解釈したのか、おそらく無知な観光客に呆れつつも気の毒に思ってくれたのだろうけれど、「他のものじゃ、駄目なのかい」。それは、無礼を承知で喩えるとすれば、我が儘な孫の願いを叶えようとする祖父のようだった。

私は、甘やかされた孫の大半がそうするように、首を横に振った。

「そうかい」と、老人は少しだけ悲しそうな顔で言った。それきり、私達の間に会話は

なくなった。
　しばらくすれば老人は去るだろう、そう思っていた。それは寂しさよりも、少なからず罪悪感を抱かせる考えであったけれど、間違いないだろうとも確信していた。ただ、その後で自分がどうするべきなのかは、まるで浮かんでこなかった。
「どうして、こんな町に来たんだい」
　けれど、結果的に私の予想はあっさりと覆されることになった。
　思いがけない展開に振り向くと、老人はまるで気を悪くした様子もなく「ガイドブックに載るものなんて何も無い田舎じゃなくて、ナポリにソレントにアマルフィ、もっと観光に向いている場所はあるだろうに」。
　「それは…」と続けようとして、私は、黙ってしまった。答えたくなかったとか、不信感を覚えたとか言うよりも、詰まる所、適当に取り繕えるほど言葉が上手くなかったと言うだけだった。
　誰かに追われたわけでもないのに、いっそ追ってくれる相手もいないのに、逃げるように日本を出て、向かう先はイタリアに、それも南イタリアにしようと、それだけは決めていた。そして着いてからは、明確な目的など無く、ただ日本人のいそうにない場所を求めて進んでいた。その結果、いつの間にかこの地へ来てしまっていた。そんな気遣いは、まるで必要なかったのに。だって彼は今、新しい家族と日本で幸せに暮らしているはずなのだから。
　すると老人はしばらくの間を空けてから、何言かを告げてきた。それはどうやらことわざか格言らしきもののようだったのだが、申し訳ないことに、私には「テーブルでは歳を取らない」の意味をきちんと理解することは出来なかった。ただし、そう言った老人の顔はやっぱり明るくて、それから彼はこちらの反応も意に介さず「パネットーネは無いが、最高のピッツァならご馳走するよ。この辺りの連中が夕食後に集まる店なんだがね、実は夕方からピッツァを焼いているんだ」と言って笑った。
「だから、さぁ、とにかく行こう。ここは寒いだろう」
「でも…」
「熱々のピッツァを頬張れば、心も体も温かくなるさ」
「……」
　不意に、もしかして、と思った。もしかして、この老人は、単なる興味半分で声を掛けてきたのでなく、それよりももっと深い理由から声を掛けてきたのかも知れない、と。
　…なるほど。観光シーズンが過ぎて、ましてや観光地でもない町で、女が一人ぼんやりと薄暗い海を眺めている姿は、確かにあまり愉快なものではないだろう。
　勿論、それは私の勝手な思い込みで、真実なんて分からないままであったのだけれど、でも、もしもそうであったとしたならば……そう考えた途端に、泣きそうになった。
「おいおい、どうした」
　いきなり顔を歪めた私に、老人の口調も変わる。たったそれだけのことが無性に嬉しくて、悲しくて、私は再び泣きそうになる前に、こんなことを問うていた。「どうして、私に話し掛けてきたんですか」と。
　果たして、老人はとびきりの笑顔で「言っただろう。俺は日本が大好きなんだよ」。
　私のことを中国人か日本人か分かっていなかった事実は綺麗に無かったことになってい

て、或いは本気で忘れているのかも知れないけれど、とにかく、何ていい加減な人なのだろうと思った。そしてそれ以上に、何て愉快な町だろうと思った。やっぱり、この老人はただ単に観光客をナンパしに来ただけなのかも知れない。でも、だとしたら、それはそれで素敵じゃないか。

南イタリアの海辺の町で、偶然出会った男性と、伸びたチーズで綱引きをしながら、美味しいリモンチェッロのグラスを傾ける。

映画にするには少しばかり俳優と女優に年齢差があって、ハーレクインには残念ながら主役も舞台も地味だけれど、例えば個人の日記の一ページを埋めて、遠い未来に昔を懐かしむ物語になる程度には、価値のある出会いと呼んで良いのだろう、きっと。

いつしか私はほんのちょっとずつではあったものの、一緒に行ってみても良いかなと言う気になりつつあった。見知らぬ土地や人間に対する不安は、たった一歩さえどの方向に進めればいいか分からなかった時を思えばまるで些細なことだった。

私は初めて、老人にちゃんと向き合っていた。

「行ってくれるかい」

「楽しそうですね」

「楽しいよ、とてもね」

老人の表情を見ているだけで、その言葉は本当なのだろうという気になった。

「だったら、行ってみたいです」

自然と発せられた言葉に、違和感はなかった。

「なら、行こう」

老人はそれが当然の流れだとばかりに頷いた。

「さぁ、こっちだ」と、海岸線と平行に元気よく歩き出した老人に付いていきながら、ふと腕時計を見た。もうじき、午前九時。海を眺め始めたのが、彼が普段に家を出る頃だったから、いつの間にか一時間以上も経っていたらしい。今頃はもう、とっくに職場に着いてコーヒーでも飲んでいるのだろう。

「ほら、あれ」

と、そこで急に老人が足を止めて、私は反射的に顔を上げた。そして、小さく声を漏らした。

ぴんと伸ばされた老人の右手が指し示す海の向こうでは、先ほどまでの薄暗さから一転して、色鮮やかに染まった空が広がっていた。

決して、綺麗なあかね色のみに彩られた、そんな純粋な夕焼けじゃない。でも、雲の切れ間から差し込む光が周囲に反射して、少しずつ色味を変え、そうして作り上げられたモザイク画めいた虹色は、いっそ単純な夕暮れよりも遙かに優しく、私の心の中へ染みた。

「時には余計なものがあった方が、美しく見えることだってある」

果たして、それはまた格言なのか、それとも単に老人なりの気取った口説き文句なのか、聞いてみたい気もしたけれど、何だか雰囲気を壊してしまいそうだったから、私は代わりに黙って時計のリューズを引っ張った。

ピタリと止まる秒針。長針よりも、短針よりも、私はそれにこそ感慨を抱きながら、老人へ「今、何時ですか」と問うた。

老人は一瞬だけ怪訝そうな顔をしたものの、すぐに自らの腕時計を見て「今は―」。

おおよそ八時間の誤差。そして私は、言われた通りに時計を合わせた。再び顔を上げた時にはもう、空は暗くなっていて、辺りもすでに夜だった。この時になって初めて、そうか、冬はイタリアも日本も同じ頃に日が沈むんだ、と知った。

「さぁさぁ、行こう。いつまでもこんな所にいちゃ、髭が凍っちまうよ」

そう言うやいなや、老人は太陽の位置なんて知ったこっちゃないとばかりに明るく歩き出した。今度は、冷たい海に背を向けて。

「そうですね」

私はと言えば、自身もまた彼と並んで笑い返しながら、今のはもしかして「髭なんて生えていないじゃないですか」と応えた方が良かったのだろうかと、そんなどうでも良いことを考えていた。

〈了〉